

松尾貴史の「ちょっと違和感」

毎日新聞夕刊の「特集ワイド」は読みごたえがあり、このレポートでもたびたび紹介している。土曜夕刊は「特集ワイド」はお休みだが、放送タレント松尾貴史「ちょっと違和感」がなかなか面白く、いつも目を通している。残念ながら、この地域では朝日新聞は数年前から土曜の夕刊を取りやめている。毎日のような企画があれば、「夕刊離れ」が解消できるのでは、と考えたりする。



さて、25日の「ちょっと違和感」は違和感がなく同感するばかりで、松尾さん流の書き方でとにかく面白い。安倍首相の安保法案の説明について、「前回辞任思い出す」と皮肉をこめて指摘しているので、期待をこめて紹介したい。

安倍氏がインターネット動画サイトの自民党の番組で、「不良の襲撃に怯える安倍くんと喧嘩が強い友達の麻生君」という、矮小化した極めて下手くそなたとえ話を用いて説明したつもりが、逆効果になってしまったのが記憶に新しい。なぜ、突っ込む人がいない自民党のネット番組に出たのかを問われ、「テレビに出してもらえないからだ」というようなことを理由にしていたが、要は反論されるのを避けたいというだけの理由だったのではないかと。

ようやくフジテレビのニュース情報番組にスタジオ出演して、「アメリカ家」の母屋が火事になって、同じ敷地の離れに延焼し、道を挟んだ「日本家」が消防を呼んで火消しを手伝うかどうかという、これは「喧嘩の強い麻生君」の時よりも、またさらに稚拙なたとえ話だった。そして、そのために粗雑な模型まで作らせて（と言ったら作らされた人には失礼だが）、事件現場を説明するアシスタントのような軽さでプレゼンテーションを展開していた。テレビ局が用意したのか安倍氏の周辺が作ったのかは知らないが、模型のグレードの低さが気になった。ひょっとすると、この法案に反対する美術さ

んでは、と変な想像をしてしまったほどだ。一番可能性が高いのは、このたとえ話をしたいと思い立った安倍氏の周辺が、時間のない中で作らせたのかもしれない。もちろん話の内容のグレードに比べれば、傷は浅いかもかもしれないが。もくもくと上がる黒煙が泥に落ちた綿菓子のように、腐りかけの肉の塊のようでもあり、まことに珍妙なのだ。話の矛盾点や隙をジャーナリストの津田大介さんや漫画家のやくみつるさんに突っ込まれると、いつものあたふた感が増した口調で論点をずらし強弁しているのが、もう痛々しいレベルになってきてしまった。

子供に指さされる総理の漫画付きでやく氏が「裸のソーリ」と指摘した時には、一瞬気色ばんだようにも見えたが、その顔色から、何かのブレーカーが落ちたようにも見えた。法案のせいで支持率が下がっていることを指摘されると、「支持率だけを大切にするのであれば、そもそもこういう法案を通そうとは思いません」「支持率のために政治をやっているではありません」と強弁していたが、この物言いは「国民がどう思おうと、私の方が正しいのであって、この道しかない」と言ってしまうようでややヤケクソ気味でもある。

安倍氏が前回総理大臣を辞した時のことを頻繁に思い出すのだが、表情や質感があの頃とダブって見えてきたのは、私の希望的観測だろうか。

(2015年7月28日)